

## パリの都市型集合住宅とその中庭の意味に関する研究

— 欧日の中庭型住宅の比較 —

服部 岑生

M. エルブ

キーワード：1) 中庭型, 2) 住宅市街地, 3) 集合住宅, 4) 都市住宅, 5) インナーシティ, 6) パリ, 7) 都市居住, 8) 共用庭, 9) フランス, 10) 現代住宅

### 1. 研究の目的

#### 1.1 研究の目的

研究の具体的な目的は、第1に中庭型集合住宅の否定から再評価までの経緯を明らかにすること、第2に現代の集合住宅計画における中庭型集合住宅の実態を明らかにすること、第3に現代の中庭の意味を明らかにすること、第4に中庭の潜在的な意味を明らかにすること、最後に欧日（パリと日本）での中庭の意味の違いについて明らかにすることまでの5項目である。

### 2. パリの中庭型—庭の見える窓への回帰

#### 2.1 はじめに

フランスにおいては、古くから中庭のある住宅がつけられていた。しかし、19世紀のパリの市内の住宅では、表通りに貴族などの富裕な階層が居住し、奥の中庭に面した住居には貧困な階層が居住していたため、中庭はよいイメージが持たれていなかった。<sup>※1, 2)</sup>

こうした中庭の小ささに関する衛生主義者の批判は、パリの「建物の高さ」と突起部に関する1902年8月13日付市条例<sup>※3)</sup>の制定の際に反映されることになる。この法律は、中庭によりアパートマンに取り入れられる空気、光の量および部屋の換気状態が中庭の最低規模を決定する際の新たな基準となった。また、従来の高さと面積の比率に代わり、「直接的見晴らし」の考えが導入された。人道主義者たちの研究から、19世紀の初めには、前世紀の大きな中庭と歩廊を有する労働者向け住居は好ましくないモデルと見なされるようになり、また労働者にも嫌われた。彼らは、より将来性のあるモデルとして、更に大きな中庭と、特に居住者を小ブロック（各階には最大でも2～3戸）に区分することのできる多数の階段を持つ住宅を提案した<sup>※4)</sup>（図2-1）。

衛生主義者達の運動により、特に衛生的で家賃の安い住居において、中庭に更に大きな規模とより高い意義が再び与えられることになった。これらの建物では大きな庭園中庭とその脇に小さな庭が付けられている。こうした大型のプロジェクトでは、居住者である労働者の台所と居間を兼用している共同部屋が庭園中庭に面していることもあった。1930年代末までは、建物には中庭、広場、

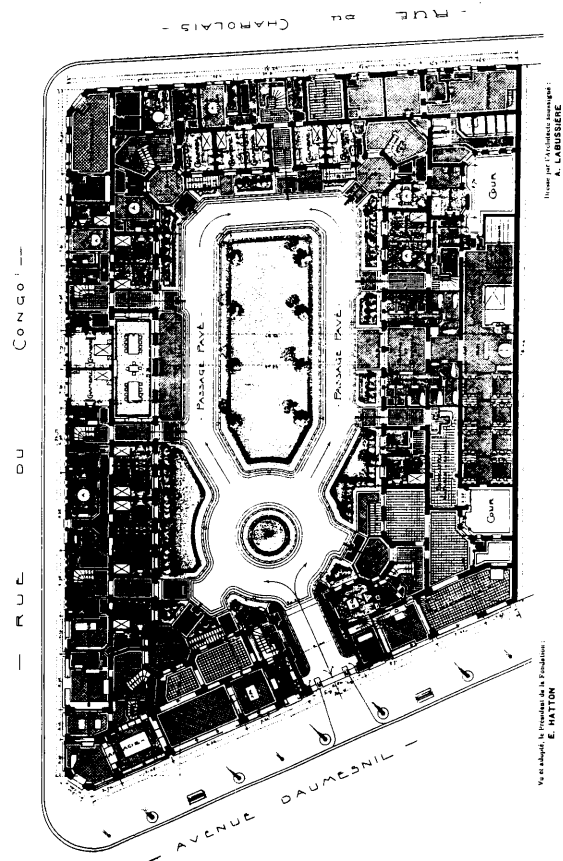


図2-1 ドーメニル通り集合住宅1階平面図  
(A.ラビシュール, 1908)

Immeuble 124-126 avenue Daumesnil, Auguste Labussière architecte, 1908, plan du rez-de-chaussée.

またはルダン（“redans”, 凹状の建物の凹んだ部分）を持っていたが、その後、特に戦後は、「ムーヴマン・モデルヌ」（近代化運動）が奨励する「ツール型」（“tours”, 塔状住棟）や「バル型」（“barres”, 板状住棟）等の新たなタイプの住居用建物により取って代わられた。これらの建物は空きスペースを持っていたが、これは直ぐに駐車場となってしまった<sup>※5)</sup>。

#### 2.2 中庭の消滅と現代における復活

衛生主義者達の日照重視の主張により一時的に中庭の有用性が認められたが、1920年から30年にかけての「ム

「マン・モデルヌ」において人間の必要条件に応じる社会住宅の検討が徹底して行われた。その結果、以下の項目が挙げられた。遊戯、交流、憩いの場として利用できる大きなグリーンスペースの設置と開放。科学的に規定される太陽熱を考慮した建物とアパートマンの方向。道路に沿って住居を沿道配置することの禁止等々。この思想はアテネ憲章（1933年第4回国際近代建築会議<sup>86)</sup>の基本理念によりその全体がよく表されている。このようにして大型中庭は更に拡大され、結局、広大な開放的空間が現れてきた。

実際には1961年（1967年承認）のパリ市の「基本的都市整備計画規則」では、1930年代末まで都市型集合住宅の特徴であった半個人的大型中庭の考えはなくなり、新たな優先課題がはっきりと打ち出されていた。アンリ4世<sup>87)</sup>の時代から主として公共領域と個人領域の関係を規定していた建物を沿道に配置する都市計画から、形状が意識的に簡素化され、日照と構成を重視した高層建築が推進された。これは、道路より、機能を重視する直交式のシステムにすることであった<sup>88)</sup>。合理的で機能的な都市工学的概念に基づき、建物を公共道路から引き離し、その敷地内に孤立した形で建築することが明確な目的となった。「建物間の距離を広く取りかつより高くするためだけでなく、道路の騒音から隔離するために、道路から引き離して建物を建設することはしばしば合理的である<sup>89)</sup>。」この方針に基づき中庭とはまったく性格を異にする自由空間に囲まれた建物が構想されるに至った。

この20世紀後半まで続いた状況に変化が生まれたのは、パリ市議会が1974年12月19日に行った決議によってであった。1974年の土地利用計画は以前の条例に比べての極端な姿勢の変化を示している。同計画はパリの都市としての景観の一貫性に欠けた変化と都市の個人空間と公共空間の間の中間ゾーンのクォリティを失わせた責任を負う「塔状住棟」に反対するとの立場を取り、道路、街区、地区等の伝統的な都市構成要素の復活を奨励している。この条例は歴史都市と近代的都市整備計画の間に可能な連続性をテーマとする新たな研究とセオリーの実現の後に制定されたものである<sup>90)</sup>。

研究者、都市工学者および技術者にとって、この条例は、空間構成要素のヒエラルキーに関連する空間のクォリティの復活が基準となったものと思われた。その結果、中庭は建物にアイデンティティを与え、また都市空間および住居空間のクォリティを決定するものとして、中庭型集合住宅が再び適当であると見なされた。こうして中庭型建物は、中庭が生み出す隣人関係や、中庭の持つ公共空間と個人空間の中間的役割に関する議論と共に再び現れたのである。

## 2.3 今日の中庭：構造的な自由空間

現在、中庭と建築様式に主として2つのタイプが見られるようである。これはプロジェクトの規模に関係したもので、道路に面した小中庭と街区の中心部の庭園中庭の2つである。

### (1) 道路に面した小中庭

このタイプの中庭は小さな面積（200～500㎡）を持ち、特に石畳敷であることを特徴とする通行のための空間として構想されており、主として街区の最も奥に建築された住棟のほとんどの部屋の採光と通風を保證する必要性から存在するものである。これは決して残余空間の利用のために構想されたものではなく、反対に奥行き深い街区を統合した再開発地域の境界部のプロジェクトで、居住者の利用する空間として質が高く、集合住宅の配置の基本となるものである。ほとんどの場合、階段は少なくとも道路に面して作られているものの、ほとんどの居住者は自棟の入口にたどり着くためには中庭を横切らなければならない。

このタイプの中庭は建築家によってプロジェクトの基本的な要素として提示される。例えば、アンリ・ゴードンはムニルモンタンのプロジェクトにおいて、集合住宅を2つの道路の角に沿った形で単純に処理し、結果として中庭が構成されることを拒否している<sup>91)</sup>。彼は中庭は通常見られないような形状となるが、通行に独自性を生み出す断続性を作ることを選んだ。この中庭は徐々に見えてくるものであり、その形状はファサードの形状をも規定している。

フレデリク・ボレルのベルヴィル通りのプロジェクトに見られる道路に面した小中庭もまたプロジェクトの中心的要素として提示されている（図2-2）。このプロジェクトは、19世紀に一般化された都市建築を隣接する区画で挟み込むように建てる原則に従い、区画奥に建てられ、道路側では隣の建物と並ぶC型の建物から構成さ

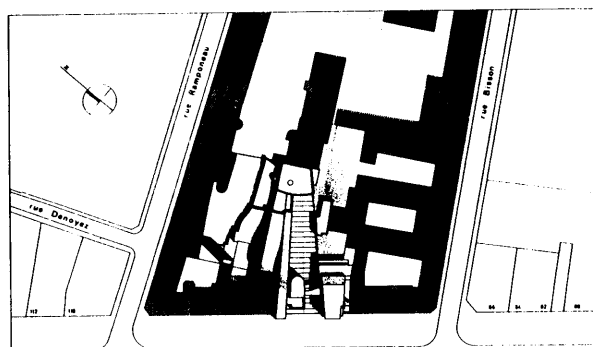


図2-2 パリ20区ベルヴィル通り集合住宅（商店・事務所複合）マスタープラン（F.ボレル、1987-1989）  
Frédéric Borel, immeuble 96-100 bd. de Belleville, Paris 20e, 47 logements, commerces et locaux d'activités (1987-1989), plan masse.

れている。しかし、道路に面した住宅棟は、建物と統一化され秩序を持ったファサードと共に、公共空間に対して閉じられず、公共空間に面する中庭の開口部が強調され、その結果として従来の街区の閉鎖した境界部にまたがる3つの独立した建物が連結した形になっている。両脇の白石造の2つの建物に囲まれた入口を持つこの開放型中庭は中心の金属製の保護柵に守られた小さな塔を持つことを特徴とし、都市型集合住宅の要素の一つとなっている。この集合住宅計画は従来の建物の並び方を継承しつつ、同時に建物の中心に視点を持つことでこれを革新するものとなっている。ボレルは、中庭を二義的な隠された空間と見なす慣例に対抗することを意図し、道路空間との連続性を提唱している。「パリに見られるこの空間は従来は閉鎖され、街区の中心に押し込まれていたが、道路に対して開放されたものとなった。中庭は快適で日当たりの良い、長時間滞留する空間として捉えられなければならない」<sup>12)</sup> 1階を占める商店やオフィスが道路における都市の活動と中庭の連続性を生み出し、昼夜開放されている公共空間のあり方を示すものである。

ローラン・イスラエルとオリヴィエ・ジラルールのデュシェドラヴィルのプロジェクトでは、道路に面した小中庭が同様にこの戶外空間の回りに意識的に構築されプロジェクトの中心となっている。「この中庭は自然にできあがったわけではない。Semapa<sup>13)</sup>とApur<sup>14)</sup>が作成したZAC計画<sup>15)</sup>では街区(33.5×40.33m)の中に、道路側にファサードを持ち、奥に向かって建てられている単一のT型の建物を提案していた。この形状は土地利用と経済的な効率性から言えば望ましいものであったが、単一翼の端から端まで、同じ状態で同じ価値の残余外部空間を構成するもので、中庭も庭園も想定していない」<sup>16)</sup> (図2-3)。

ローランとオリヴィエはZACの案を否定し、ファサードをかなり大きくする代償を払うことを覚悟の上で、より独創的な形態を提案した。最初の建物R+7は道路に沿って、但しバルコニーを設置するために隣の建物群からはやや奥に引っ込んだ形で建てられた。街区中心部の1つはR+3でピロティの上に建てられ、もう一つのR+4はそれぞれ異なる1階部分で繋がっているオープンスペースを作りだしている。脇に居住者用の庭園が2つと中央に道路に面し開放された小中庭がある。建築部分とオープンスペースの比率を良好に保つために、2つの建物は奥行きを6.6mに制限されている。

中庭を居住者にとってプライベートな外部空間とするアイデアも一部の建築家の目的にあった。ゴードンは、街区の奥の秘密で神秘的な空間を隠すバリアを除去するために、都市空間に「断層」を設けようとした。例えば、彼のプロジェクトではムニルモンタン地区の典型的な奥

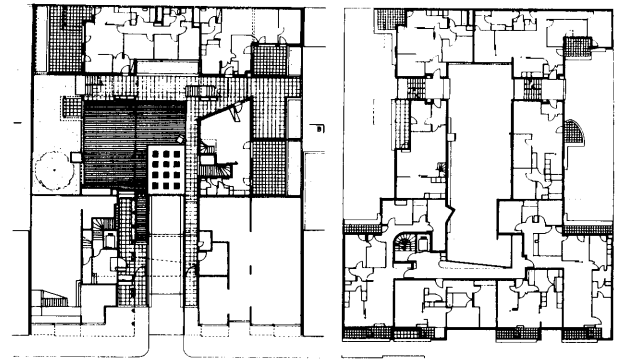


図2-3 パリ13区デュシェドラヴィル通り集合住宅1階・3階平面図 (L.イスラエル, O.ジラルール, 1991-1993)

Laurent Israël, Olivier Girard, immeuble 8-10 rue Duchefdelaville, Paris 13e, 41 logements et commerces (1991-1993), plans du rez-de-chaussée et du deuxième étage.

行き深い中庭を覗かせる断ち切られた建築線を提案している。「ひっそりとした、内面的な場所を再発見しようとした。ここから内部とその相対的な複雑性を垣間見せる断層のような入口が生まれたのである。この亀裂は、私が消え去るのを懸念する切り妻やクレットといった古いパリの他のものと同様に廃れて行く」<sup>17)</sup>。

建築家達はそれぞれの方法で、居住者達に散歩と発見の喜びを与えようとしていたようである。ボレル<sup>18)</sup>のプロジェクト(公共開廊)、ジャック・リポーやフェルナンド・モンテスのビッソン通りのプロジェクトやランポノー通りのプロジェクト(公共通路)は、その好例である。

モンテスもまた、建物を1つは道路に面し、今1つは街区の奥に位置する2棟に分けることを選んだ。道路側に作られた大きなポーチが内側への通路の始まりとなる。この通路には円形の小中庭、通路の端、これを結ぶ通路、1階のアトリエといったシンボリックな空間が続き、通路は金属製の屋根により覆われており、また、中央の中庭をそれぞれ異なる特徴を持つ幾つかの空間が分割している。

ポーチや通路といった中間的な空間に壮大な装飾を施すことは、20世紀初頭に人道主義者達がより大衆的な階層の集合住宅にパリのブルジョワの建物からの着想を得て、試みている。

この伝統は第1次大戦と第2次大戦の間、HBM(低家賃住宅会社, Société Française des Habitations à Bon Marché)により長い間にわたり引き継がれたが、近代化運動の理論には対抗することができなかった。このタイプの処理はジラルール、モンテスおよびボレルのプロジェクトに見ることができる。ボレルにおける、街区中央の中庭への進入の考え方は都市空間と中庭空間の理想的な境界となるモニュメンタルな2つのポーチ風の2

つの亀裂の処理により強調されている。ベルヴィル通りから、中庭は、高齢者や学生のための建築線からやや引込んだ「ステュデット」（ワンルームの小アパートマン）と金属製の中央の塔により区分されるこの2つの通路によりはっきりと規定されている。

## (2) 街区中心部の大型中庭庭園

街区を構成する統合された幾つかの地域の中心部に位置するこのタイプの中庭は大規模な統一的空间（1500～2000㎡）となっている。

このタイプの中庭の最も重要な特徴はその構造の複雑さである。石畳の通路とグリーンスペースとに区分される非常にヒエラルキーのはっきりとした地上空間の形で、幾つかの独立した部分により構成されていることが多い。例えば、パトリック・シャヴァーヌはバニョレ通りについて、細長い敷地と建築条例の遵守の結果として分割された空間を快適な中庭に変えることに成功している（図2-4）。同一プロジェクトに属する建物のみで囲まれた空間を作ることが不可能であったことを、石畳の小型中庭、菜園、個人用グリーン・スペース、軽い勾配になった英国風小中庭等の一連の際立った特徴を持つ場所を構想することによりカバーしている。様々なレベルの設定により、これらの空間の境界を明確にし、また、通路、斜面、階段といった統一的な通路を形作る建築的エレメントの導入を容易にしている。ある意味で住居の拡大・延長方法として考えられ、統合的に処理され、しかし、同時にそれぞれが独立してもいる、これらの外部スペースは親密な空間となった。「ここでは夏には人々は外に出<sup>しやべ</sup>て、庭仕事をしたり、お喋りする」<sup>19)</sup>とシャヴァ

ーヌは言う。細部にまで配慮されて設計された中庭の空間としてのクオリティに注意が払われている。「外部空間のクオリティに関しては、設計の最初の時点から、敷地の配分時点からゆとりをもって考えることが非常に重要である。（中略）樹木なども贅沢に植える。場合によってはこれは人々の親密性と快適性に重要な役割を果たす」<sup>20)</sup>。

中庭を形作る空間のヒエラルキーの同じ原理がレンゾ・ピアノのモー通りのプロジェクトやニコラ・スーリエのグループのヴェルツ通りのプロジェクトにも見られる（図2-5）。ピアノのプロジェクトにおいては樹木の植えられた空間が、道路と街区の中心を結ぶ非常に規則的な形に付けられた通路により区分されており、スーリエのプロジェクトでは通路や小路、テラス（やや地面が高くなっている部分）等で変化が付けられている。ここでは大型中庭は部分的に従来の公園跡を利用した公共の庭園と菜園や果樹園といった様々な空間が配され、ベンチの置かれた散歩道に変えられている。土地が軽く傾斜していることがテラスを置くことと、建物の多数の凹状部により形作られた個人用小庭園に区分することを可能とした（図2-6）。

限定された土地の用途を多様化するために、ジョルジュ・モリオのフォンタラビ通りのプロジェクトにおいて、小スクエア、低くなっていく石畳の通路、静かな遊び（砂遊び）やより活発な遊び（ローラースケート）またはベンチでのんびりと日光浴を楽しむことができる樹木の植えられたテラスといった生活リズムの異なる人々を混在させるような幾つかのタイプの活動を可能とするコーナーを設けた。同じタイプの空間処理の原理は、オリ

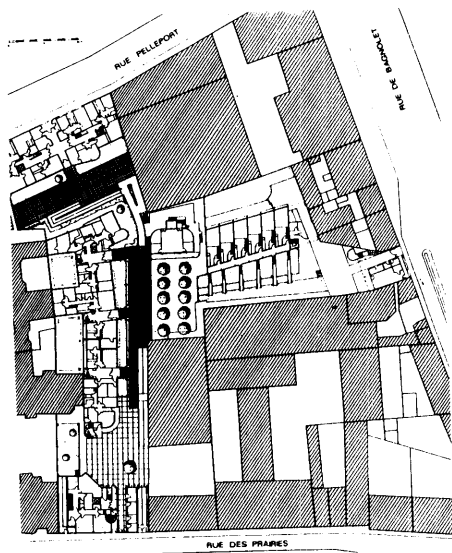


図2-4 パリ20区バニョレ通り集合住宅マスタープラン  
(P. シャヴァーヌ, 1985)  
Patrick Chavannes, immeubles 133 rue de Bagnolet, Paris 20e (1985), plan masse.

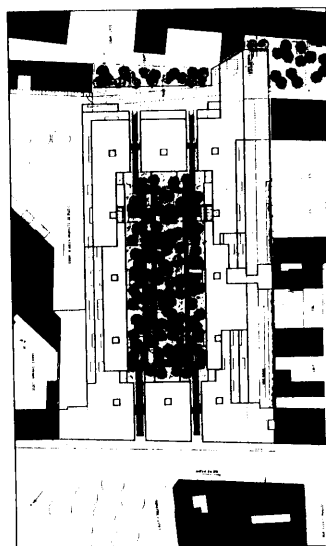


図2-5 パリ19区モー通り集合住宅マスタープラン  
(R. ピアノ, 1988-1991)  
Renzo Piano, immeuble 64, 64 bis et ter, rue de Meaux, Paris 19e, 220 logements et commerces (1988-1991), plan masse.

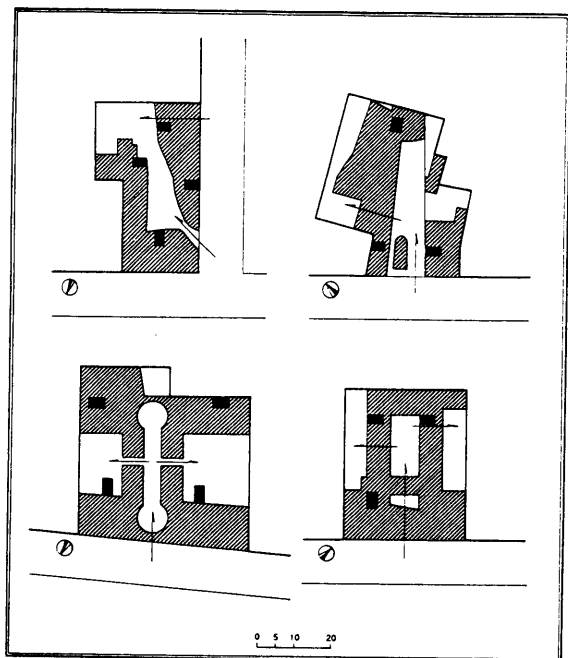


図2-6 道路沿いの小中庭の模式図  
La petite cour ouverte sur rue, schéma des opérations.

オル・ボヒガスのバルセロナのマンザナ・モレットプロジェクトにも見られる。

通路、ポーチ、入口といった道路と中庭の中間部分の慎重な処理は、これらの半共用空間の差異化と順位付をするという点で、プロジェクトの重要な部分をなしている。スーリエとパトリック・セレストがヴェルツ通りのプロジェクトにおいて構想した高さが2レベルになっているポーチは、道路と庭園の視覚的そして物理的關係を生み出し、公共歩道、建物の入口（居住者用）、半公共中庭庭園との異なる特徴を持つ3つの空間に区分している。「我々は異なるスペースを空間的、視覚的に区別することを考えた」とセレスト<sup>文21)</sup>は語り、また、この1種の建築物の下への交通路は恒常的な形で市民に開放されなければならないと付け加える（図2-7）。「これは単なる通行権を生むだけで、所有権の放棄が必要であるわけではないが、実際には実現されなかった。今日では鉄柵がある。（中略）通行は可能であったが、多分『公園と庭園』の自立化の意志と<sup>文22)</sup>、この大きなポーチが高級アパートマンと考えられた住居に続くものであるために、閉鎖されたのだろう」。中間部分であると共に区分しておきたいと考える2つの領域の境界でもある、ポーチはここではこうした二律背反した役割を果たしている。再現された重い石梁を乗せた一連の円柱による透視性を持つと同時にその支える建物の巨大な質量により押しつぶされた暗い空間である。

その規模（高さが2段階になっている）と対称性により、2大戦間にパリ市の旧城壁跡（パリを囲む形になっ

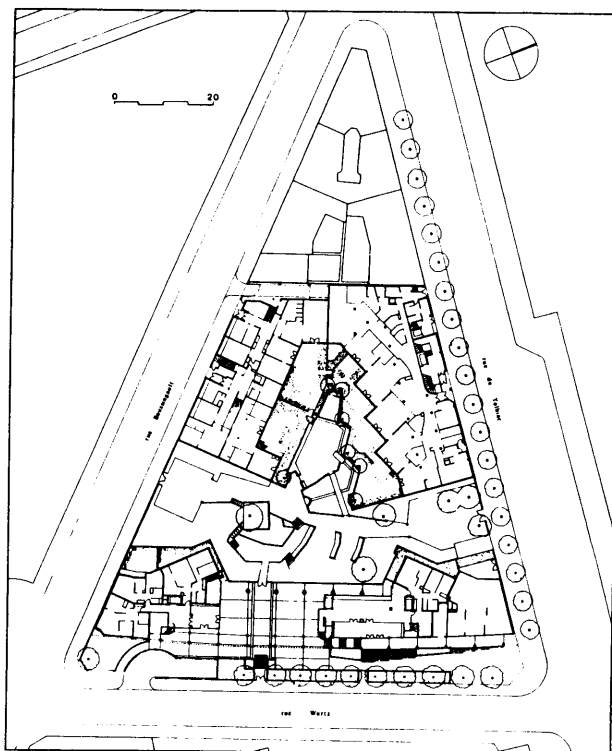


図2-7 パリ13区ヴェルツ通り集合住宅1階平面図（託児所、福祉施設、オフィス複合）（N.スリエ、P.セレスト、ミシュレ、1986-1989）

Nicolas Soulier, Patrick Celeste, opération Michelet, rues Wurtz, Tolbiac, et Boussingault, Paris 13e, 108 logements, une crèche, deux bâtiments destinés à l'aide sociale et des bureaux (1986-1989), plan du rez-de-chaussée.

ている）に建てられた低家賃住宅のモニュメンタルなポーチを思わせるフォンタラビ通りのモリオのプロジェクトにおいて構想された通路は個人領域と公共領域の間の連結と分割を同時に行おうとの意志を示すものである（図2-8、9）。

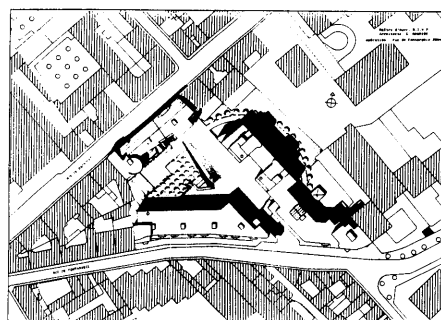


図2-8 パリ20区バニョレ通り、フォンタラビ通り集合住宅マスタープラン（保育所設置）（G.モリオ、1985-1987）

Georges Maurios, immeubles 74 rue de Bagnolet et 11 à 21 rue de Fontarabie, Paris 20e, 154 logements, et halte-garderie (1985-1987), plan masse.

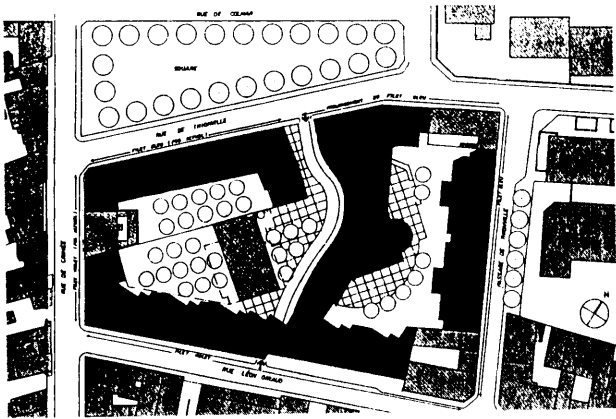


図2-9 パリ19区クリメ街集合住宅マスタープラン  
(G.ブーシェ, 1987-1992)

Gilles Bouchez, îlot Crimée, Paris 19e, 134 logements, une crèche, locaux professionnels et commerciaux (1987-1992), plan masse.

## 2.4 中庭, 日当たり, 各部屋の向き

中庭が空気と日光の供給源と見られていた19世紀から20世紀にかけてのパリでは、中庭を大きく取り、これを庭園とする時には、メインルームの窓を中庭向きにし、中庭は道路に勝るとも劣らない価値を持つこと示していた。今日では、オスマン男爵時代と異なる点は、ヒエラルキーの考えに基づいて設計されていないことである。

モリオはフォントラビ通りのプロジェクトの全ての建物において、居間を南向きにした。そのため、それぞれの居間は場合により道路または公共空間と考えられた中庭に面することになり、バルコニーが付けられた。

スーリエとセレストのヴェルツ通りのプロジェクトにおける児童公園や市民の散歩空間として設計された中庭は街区を囲む道路の騒音を避けると共に特に出来るかぎり日当たりを良くするために部屋をこれらの「内部空間」に向けて作るとの意識的選択を示している。中庭は日光を入れるために南側に出入口を持ち、各アパートマンの居間はほとんどがこれらの庭園に面し、大きなフランス窓を設けている。「遠くの風景を眺めることを可能にする」、そして同時にファサードのラインを伸ばし、日当たりを良くするとアイデアにより建築家は庭園側のファサードの一部に楕型の凹凸を作った。

中庭が狭い空間である場合には、内側の開放された空間に重点を置いていたにもかかわらずほとんどの居間を隣接する道路側に向けて作っているゴーダンのように、建築家達は道路を優先した。

ノワジー・ル・セックの77戸の住居のプロジェクト(1993年)において、エルヴェ・シャンソンとアンナ・ヴァニエは並行した2つのバル型建物を建てた。これらの建物は波状のファサードを持ち、内側に石畳で植木の植わり、「内部道路」と呼ばれる大ポーチを有する中庭がある。全ての住居にテラスとバルコニーまたは個人用

庭、そしてほとんどが建物の両方向に窓を持っていた。しかし、居住者に「親密性の一助となると見られていた中庭」<sup>231</sup>は、植木の植えられた道路に向かって窓を有する大きな居間が置かれるなど、活かされていなかった。ステュディオ(1部屋のアパートマン)のみがその大きな部屋を中庭庭園に向けているのに対して、他の住戸では全ての寝室と作業部屋の一部は中庭に面していた。

モンテスはランポノー通りに沿った建物においては、道路側の見晴らしを重視する従来のヒエラルキーに従い、北向きであるにも関わらず、道路に面して居間を作った。しかし、寝室と台所は中庭に面して南向きであり、非常に日当たりの良い大きなバルコニーを設け、居住者は季節の良い時期にはそこで食事を取ることができた。モー通りのピアノのプロジェクトでは、多くの寝室が静かでくつろげる空間であり、子供の遊びのための場所がまったくない中央の大型中庭に向いている。一部では、寝室と居間の分離は暫定的なものでしかなく、居住者は寝室を仕切りにより閉めることを諦めることにより、2方向に窓を持ち、公共空間と個人空間への移行を可能とするロシアにより中庭にむけて開かれた大きな居間を持つことができる(図2-10)。

現在のところ、良く知られた中庭の持つ問題点、雑居性と日照の不足を考慮して、建築家達は中庭の規模を大きくし、高さの異なる建物を建設し、日影が生まれることを出来るかぎり避けようとしている。

ボヒガスの建てたバルセロナのマンザナ・モレット川近くの4辺形の建物はこうしたタイプのプロジェクトにおける光に対する興味深い考察を示すものである。ボヒガスはこのプロジェクトでは3つの方法で住居に採光性を良くしようとしている。中庭を非常に大きなものにし(100m×100m)、出来るかぎり日影が少なくなるように高さの異なる建物を並べた。しかし、最も重要な改革は住居の配置の工夫である。全てのアパートマンが通常は2つ、場合により3つの方向に窓を持ち、主部屋は最も良い方向を向いている。アビングダ・デ・リボリの南向きの建物では入口は北側の中庭の中に作られている。作業部屋も北側を向いており、主部屋は南向きでテラスや歩廊(高さタイプによる)が設けられている(図2-11)。

これに対して、対面する中庭に面した建物では、主部屋は中庭向きで南側に位置し、セカンドルームは北側の、非常に開口部の少ないファサードをもつ建物の後ろ側に位置している。並行して建てられた建物は東側にあり、東西に窓を持つアパートマンを持ち、二次的な部屋に向かい合い、主部屋は見晴らしが良く、一部は庭園側(西向き)、一部はマンザナ側後方の風景に向いている(東向き)。2方向に窓を持つアパートマンの増加は内部の移動の問題を起こし、多数の階段を必要としたが、これ

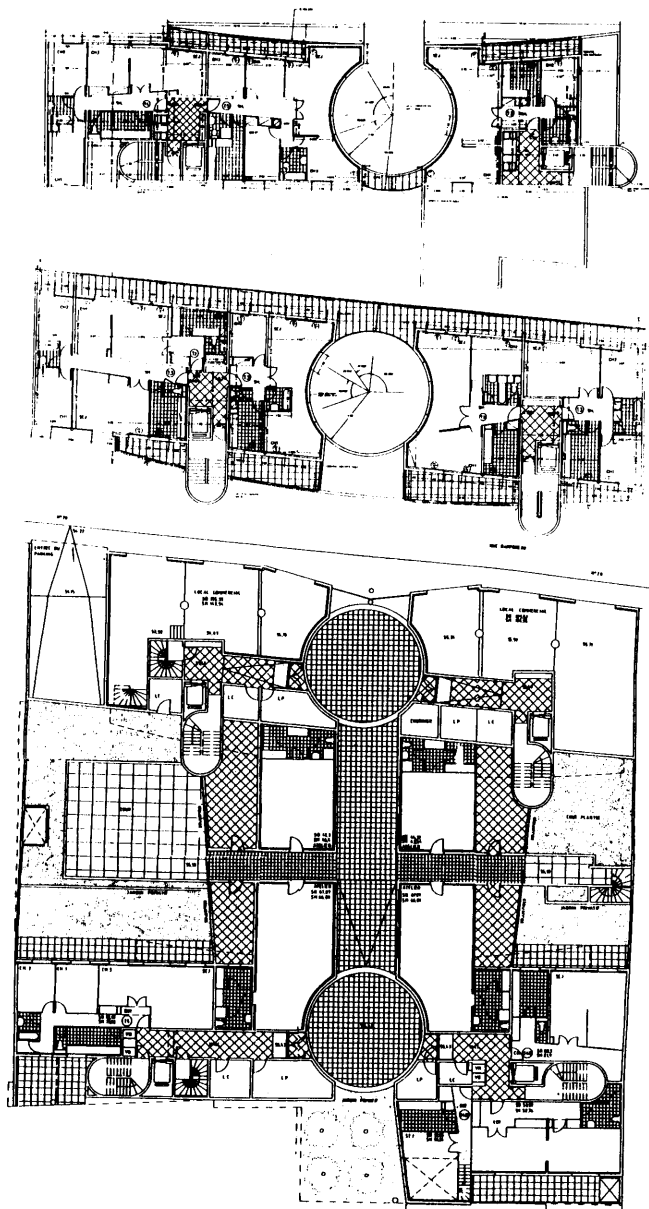


図2-10 ランポノー通り集合住宅1階・2階平面図  
(F. モンテス)

Fernando Montes, immeuble rue Ramponneau, plans du rez-de-chaussée et du premier étage.

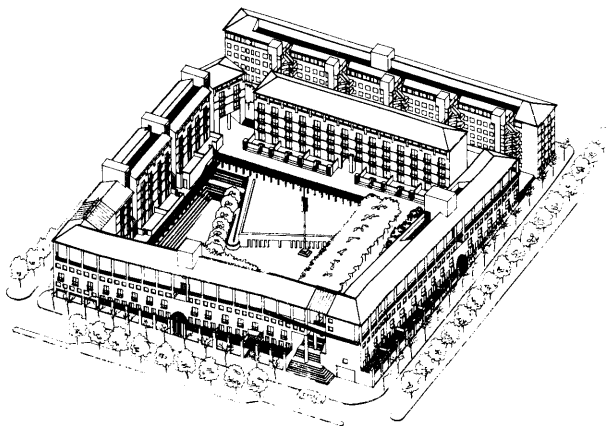


図2-11 バルセロナのマンザナモレ集合住宅  
(O. ボヒガス, 1983-1987, アクソメ図法)

Oriol Bohigas, Manzana Mollet à Barcelone, 200 logements (1983-1987) axonométrie.

は建物の2棟についてはこの問題は上階の歩廊, 1階と2階の住居別の入口を設け, 他の2棟については外部の蹴込み板のない階段(2棟に5つ)と1台のエレベーターにより解決されている。

以上のような様々な方針からどのような結論を得ることができるだろうか。中庭が大規模なものであり, 庭園となっている場合は, 建築家は日当たりが良い場合にはメインルームを中庭に面して設けようとする。やはりこの日当たりとの条件はほとんどのケースにおいて決定的である。ステータスや中庭の規模と役割により, 日当たりの良さまたは見晴らしの良さのヒエラルキーが下り, 都市空間のクオリティが決定的な要因になることがある。クリスチャン・ラベはこの状況を上手くまとめて次のように言っている。「ヴォージュ広場であれば, 北向きにも居間を置くことができる」<sup>(x24)</sup>

## 2.5 中庭型建物とその潜在的社会的性

中庭は道路と住居の中間的性格から快適な往来道, 遊戯の場所, 寛ぎの場所, 散歩道または眺めるための場所, 全ての活動が禁じられた表出の場所として設計することができる。これらの様々なステータスにはそれぞれ異なる対応が必要となり, しばしばその旨が賃貸契約書や区分所有者規則に記されている。また, 良い隣人関係を維持することを可能とするルールを遵守する共同体の存在の象徴でもある。

新たな都市の近隣交流の場所として考案された中庭<sup>(x25)</sup>は住居の回りに, 静かな黙想<sup>(x26)</sup>が中心となる特別の空間を作ることを可能とした。道路から住居まで, 半公共, 半個人といったステータスの異なる様々な空間が続く。都市の匿名性はないが家族同志の寛容性ともいえないこの場所は, 公共, 個人, 私人の間の対立の原因となることがある。ある中庭では, 低年齢の児童の遊戯は許すが, より高年齢の児童のそれは許されず, 別の中庭では, スケートボードやボール遊びといった騒々しい遊びも少なくとも日中は許容される。一部の街区の庭園型中庭では, 大人がベンチで日光浴を楽しみ, 他の中庭ではそれが不可能となっていたりする。一部の建築家は季節の移り変わりやテーマを持つ庭園を作り, 他の建築家は伝統的な芝生を植え, 自然を強調する。

しかし, これらの差異以上に, 建築家が小区画上に1つの建物を建てる場合と, 地区全体を再編成する大きな街区上に建てる場合とでは, 社会的に都合の良い条件を生み出す可能性が異なってくる。

前者の場合では建築家は, 建物の中間的空間において近隣交流を図ろうとするだろう。イスラエルとジラルールのプロジェクトでは, 道路側のファサード上の大きな開口部の存在は大きな正門が半公共空間の性格を持つ中心空間への移行を示している。親和的空間, プライベート

から都市性への移行空間、中庭はここでは戸外の部屋として考案されている。

後者の場合では、例えばロラン・シムネがサン・ドニで担当した2つの街区では、中庭のほかに、共同の歩廊やテラスが近隣交流を可能とし、催しを行うために集める場所となるように考えられている。同時に、住人のプライバシーは（住居の入口の）シカーヌ（ジクザクの障害物）や中庭からの直接の見通しを防ぐ手すりを守られている。「できる限り共同空間を作らなければならない。共同空間とは公共空間と違い居住者がいる程度私有化できるようなもの（例えば歩廊に花を置く等）である。（中略）人々は共同テラスに集まり、大きなテーブルを置いて誕生パーティを開いたり、家の仕事をしたり、バーベキューをすることができる。」<sup>文27)</sup>（図2-12）。

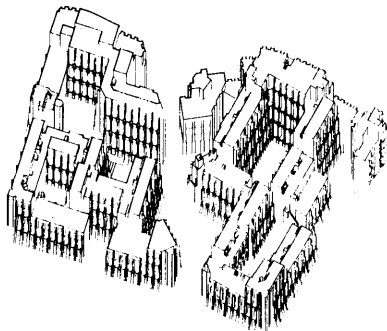


図2-12 サンドニ集合住宅南ファサード  
（R.シムネ，1981，アクソメ図法）  
Roland Simounet, immeubles à Saint-Denis (1981),  
axonométrie générale côté façade sud.

これら全てにおいて、プライベートな生活と社会生活の複雑な関係は同時に個人の自立性と社会生活の保護につながるものである。シムネはこれらをいかに併存させる努力をしたかについて、「中庭にいる時は手すりが視覚的な保護手段となって住居内が見えず、通行人は隣人を見ることができ、話すこともできる。しかし、家の中まで覗き込むことはない。住居に入ればシカーヌがある。階段はドアの正面ではなく、アラブの家のスキファのような、曲がった玄関口になっている。ドアを開けたままにしても、プライバシーを守ることができる。中間的な空間が3つある。まず、玄関の空間でこれはまだ住居内部とは言えない。そして共同の廊下の空間と中庭または庭園の空間である」と語っている<sup>文28)</sup>。

シムネはプライベート保持の要求と社会的関係の必要性のパラドックスを空間的に解決しなければならないことを良く理解している。このためにシムネは空間の透明性、連続性または延長性を利用している<sup>文29)</sup>。これはそれぞれの空間の特殊性を維持しつつ公共と個人、動性と静性を併存させることの困難性と必要性を強調したアンリ・シリアニの姿勢に与するものである<sup>文30)</sup>。

オリヴィエ・ブレナクとグザヴィエ・ゴンザレスはセルジ・ピエズーにおいて通路、テーマ庭園を持つ都市型中庭を作った。これは街区の内側に親密な空間として庭園が設けられ、大きなテラスにより南側に開放されている<sup>文31)</sup>。

シャヴァーヌの街区の中心に建てられた建物の住人は個別の庭を持つほか、住居の前には中庭庭園もある。彼らは質問に答えて、二重性、そしてこのタイプの小規模なプロジェクトでは実現が難しいと考えられている社会性と独立性の間の何らかの均衡を強調しているが、ほとんどの住人は、家賃の安いバリのアトリエ兼用住居に住むことは特権的なことであると感じている。近代建築は人気があり、各住居別の入口は住居の独立性を保証するものであり、社会的団結の要素であると思われる。全員が隣人と非常に良い関係を維持している。全ての住人が外部空間の整備に満足している。プロジェクト全体に、帰属したい特別の生活様式を持つグループの一員であることを外部に示したいとの意志が強く感じられた<sup>文32)</sup>。またこのアトリエ兼用住居プロジェクトの長所は全員が利用できる共同空間と共に、個別庭園を持つところにもある。

一般的に、我々は多くのプロジェクトにおいて<sup>文33)</sup>、住人が居住すると共に、隣人関係を維持し、個人空間と公共空間の間に親密化を図れるような空間を持てるような建築物を作らなければならないとのアイデアが実現されていることを目の当たりにする。このアイデアは中庭または歩道の周りの数棟の建物から構成される街区に良く現されている。同様に、階段や歩廊といった外部の移動空間にも建築上の処理により居住者間の交流を誘導しようとするアイデアが反映されている。

駐車場内での盗難や共同中庭を始めとする共同空間の荒廃化が提起する問題は、建物外部の人間のこれら空間への侵入の可能性に関する考察を促すものである。そのため事業者は道路に直接開放された中庭やプロジェクト内の公共通路を拒否する。しかし、こうした考察はまだ緒についたばかりであり、今までのところ、我々の知る限りでは、プログラムの中での考察事項とされたことはない。但し、プロジェクトが実現した後で、プロジェクトの初期構想を揺るがすような重大な手直しを余儀なくさせることがある。パリのフォントラビ通りのモリオのプロジェクトがその例である。プロジェクトの対象となった2道路にまたがる街区の持つ可能性を活かし、建築家はこの街区の端から端までの建物を設計したが、結局この街区は外部には閉鎖されたものとなった。「本来あるべき都市空間から、このプロジェクトは再び閉鎖された住宅の集合体、外部に閉じられた都市の中の都市といったものになっている」<sup>文34)</sup>。

外側または内側の道路に開放された中庭を作る建築家



達は近隣関係に大きな希望を抱いているように思える。シャンソンとヴァニエにとってノワジー・ル・セックの住宅プロジェクトの内側の道路は公共空間の延長と見なされるものであった。この道路はプロジェクトを構成すると同時に集合住宅や一部のHBM<sup>文35)</sup>と同様の形で近隣交流を誘導するものである。街区はすでに見られた例と同様に閉鎖されていない。貧困階層の中庭型住宅の19世紀から20世紀初頭にかけてますます一般的になってきた開放を前提とする基準はあいまいさを含んでいる。あるものについては閉鎖された世界の雑居性を表し、他のものは共同体の誕生を可能とするからである。

ピアノの建物のケースでは、周辺環境に対して自立的で独自性を持つとする強いアイデンティティを有する空間を創造しようとするアイデアははっきりしている。彼の建築チームはその強力な形状により居住者を特徴付け、団結させる自立した構造となるドメスティックなモニュメントを作ろうとしたと思われる。居住者はこれに帰属し、これにより規定される。このプロジェクトの非常に長所である隣人との一体性の確立はこの居住者により意義を高められた共同体への帰属感をより強くするものである。プロジェクトが福祉住宅のカテゴリーに分類されるものであっても、高級住宅としての側面は明らかである。しかし、中庭は鑑賞すべき絵画となっている。

ボヒガスのマンザナモレ集合住宅では同じように一体感、共同体の存在、プロジェクトの規模、居住者の帰属感、中庭における様々な活動は感じるものの、貧困層向け集合住宅の特徴的なごみごみした生活との印象を受ける。

一部の建築家にとって理由が純粹に形式上のものであるにしても、他の建築家にとっては中庭の再導入の選択は都市の近隣交流への配慮や隣人との一体性のアイデアの実現化の手段なのである。居住者にとってはその成功は、それにより許される私有化の可能性の中で、外部との関係を有効にできるか否かにかかっている。しばしば道路よりプライベートな空間である中庭は、それが可能であれば、安全や監視の考えが優先される交流の場または児童の遊びの場となる。

これらのプロジェクトは都市の質的、空間的側面の再発見のアイデアを具体化しようとしたものである。今日、幾つかの理論からそれぞれの最良の部分を取り、これらを組み合わせた上でアップ・トゥ・デート化したものであることから、中間的と評される傾向が見られる。例えば、フランスや欧州の都市を構成する主要な2つのモデル、つまりオスマン風およびポスト・オスマン風のタイプの歴史的モデルおよび機能重視型モデルが現在の建築の構造の規則と原理の下に呼び出され、再解釈されている。オスマン風では、道路に沿った形で建物を並べることが再び規則となり、歴史的モデルの特徴である都市空

間のヒエラルキーの考えは多かれ少なかれ人々が入り出す広場と道路により強く打ち出されている。機能重視型モデルは、都市的空間が自由空間として処理される、空間的、機能的、社会的な画一性が常に批判されてきたが、建物の方向、衛生条件の重視、街区の中心部をグリーンスペースとするプロジェクトを構成する様々な建物間のヒエラルキーをなくす等の、このモデルの他の原理は現在も維持されている。

都市を構成する機構として街区、道路、中庭を利用すること、旧来のシステムの形態的デザインへの配慮は必ずしもその意義をなくした、単なる装飾となってしまった都市形式主義への回帰を意味するわけではない。この都市の再発見において、プライベートと都市性の中間空間としての中庭は重要な柱となっている。注意深く作られた中庭を有する建物は居住者に住居から親密空間、そして都市へと喜びをもって移行することを可能とする複雑な空間から構成される都市モデルの実現を容易とする。このモデルはそれぞれが独自の建築的、社会的アイデンティティを有する幾つかのマイクロコスモスから構成されているのである。

### 3. 欧日の比較—おわりに

都市型集合住宅の条件を原則的に考えていく作業の一端として、欧米の都市内居住回帰思想を前提にヨーロッパ、特にパリの19世紀から20世紀初頭にかけての住宅計画の考え方と事例を発掘するとともに、フランスの専門家と共同し、詳細な中庭型の歴史・現代の状況の調査研究を行った。この結果、まず、はからずも近代の住宅・住宅地計画の理論を郊外型でしか持たない日本の現状が明らかにされた。郊外の衛生思想にのっとった平行配置が基準では、都市型集合住宅・住宅地の、根本的な計画は非常に困難であることが分かった。都市内という条件に対応する都市型集合住宅とそこにある中庭という位置づけ（パリ）と、郊外型の環境条件を実現すべく条件づけられた日本の都市型集合住宅とその中庭という位置づけ（日本）の違いは、実現の困難性として現れていると思う。この研究は、必ずしも歴史家的な正確さはないと思うが、今後の都市型集合住宅作りに向けての総合的で創造的な研究や計画の第一歩としたい。また、最初に述べたパリの中庭型に関する4番目までの目的は達せられたと考えるが、5番目の欧日の比較は、今回の研究課題としては十分には扱っておらず、次の研究課題としている。

### <文献・注>

1. モニック・エルブ、クリスティーナ・マッソーニ、デパール：「個人生活の建築物」第1巻「家屋と精神状態、17～19世紀」参照。AAM出版社、1989年
2. 母屋と翼部に付属建物を持つ形で建築された館は、19世紀には消滅傾向にあった。一握りの貴族が今もこうした館を所有

- しているがその数は非常に少ない。モニック・エルブ、クリスティーナ・マッゾーニ：「個人生活の建築物」第2巻「近代の住居の発明」316頁参照。AAM/ハザン出版社，1995年
3. ルイ・ボニエ：「道路条例」，42頁参照。パリ，シャルル・シュミット出版社，1903年
  4. モニック・エルブ，クリスティーナ・マッゾーニ：「我が家の習得，労働者向け家屋のグループ，パリ，1908年」参照，マルセイユ，ハランテーズ出版社，1994年
  5. ジャン・カステックス，ジャン・シャルル・ドポール，フィリップ・パヌレ：「都市の形状：パール型建築物の区画」参照。パリ，デュノ出版社，1977年刊，1980年再刊  
アンリ・ブレレ，アンヌ・マリ・シャトレ：「中庭型建物，櫛型とルダン型。パリの市条例」参照。ベルサイユ建築学校編，ラドラウス出版社，1986年  
アンリ・ブレレ：「中庭型建物，櫛型とルダン型。中庭向きの窓。ベレと道路に面した中庭の建物」参照。ベルサイユ建築学校編，ラドラウス出版社，1987年  
フランソワ・ロワイエ：「19世紀のパリ，建物と道路」参照。パリ，ハザン出版社，1987年  
マリー・ジャンヌ・デュモン：「パリの社会住宅1850年～1930年。低家賃住宅」参照。リエージュ市，マルダガ出版社，1991年
  6. ル・コルビュジエ：「アテネ憲章，CIAM 第4回会議」パリ，ブロン出版社，1943年およびミニユイ出版社，1957年
  7. 「フランスの王，1589年～1610年」1607年出版
  8. ジャン・イーヴ・リャンジェン，ジャン・ルイ・シュピロー：「パリ市の都市の枠組みの再構成の意志。1967年の条例」参照。パリ・プロジェクト，No.13-14，pp.36～47。
  9. 基本的都市計画抜粋。インタビュー：ジャン・イーヴ・リャンジェン，ジャン・ルイ・シュピロー，前出。
  10. 1960年代よりイタリアで発達した，歴史都市の形態学・類型学的研究の重要性を主張する思想運動とフランス学派の一部の類型の変化に影響を与える挙動の社会的分析の最初の流れの研究に貢献した議論を参考にされたい。  
特に，アルド・ロッシ：「都市の建築：パリ」エケール出版社刊，1981年（原著イタリア語，マルシリオ出版社，1966年），カルロ・アイモニーノ：「Il significato della citta」バーリ市，ラテルツァ出版社刊，1975年。既出の「都市の形状」およびジャン・ルイ・コーエン：「建築家と知識人の断絶。イタリア崇拝者の教訓」（全文報告No.1，パリ・ヴィルマン建築学校刊，1984年）を参照。
  11. フランソワ・シャラン編「ムニルモンタンのブロックの奥行き」参照。「今日の建築」No.253，pp.30～35，1987年。
  12. F.ボレルのプロジェクト紹介資料より
  13. パリ市土地整備混合経済会社（一種の第三セクター）
  14. 1967年に生まれたAPUR（パリ都市計画アトリエ）は，経済的問題および人口問題に関するパリ市の都市計画に関連する全ての研究にかかわる。APURは，パリ市整備基本方針，ZACを初め，時には小ブロックのプロジェクトをも対象として，条例案や土地整備計画を作成する。APURには74名の職員が働き，建築事務所の役割を果たしている。その上流部門の研究に基づく提言を準備し，プロジェクトを実際の具体化の直前までフォローすることができる。その協力者を重要度順に上げると，まず主要パートナーであるパリ市，政府，イル・ド・フランス地方，パリ市土地整備に関心を持つ3つの大地方自治体。ナタン・スタルクマンとの対話「新たな地平線。ZACシトロエン。ルイイ，ベルシー」参照。インタビュアー：ジャン・フランソワ・プース。「技術と建築」No.395，pp.84～93，1991年5月。
  15. ZACとは1967年に制定された土地整備制作に基づく，自治体が土地整備または建築を自ら行うまたは委託することを可能とする調整整備地域を言う。
  16. 「都市の中庭」，「建築モニター AMC」No.45，pp.38～42，1993年。
  17. フランソワ・シャラン 前出
  18. 「ボレル」「建築・運動・継続性」No.23～24，1988年12月，1989年1月，pp.82～83。
  19. パトリック・シャヴァーヌの1991年4月6日のインタビュー。インタビュアー：モニク・エルブ。A.C.シャトレ，「居住，場所の状態 1980年～1990年」，建設計画と建築社刊，1992年
  20. 同上
  21. パトリック・セレストとの1991年5月25日のインタビュー。インタビュアー：モニク・エルブ。A.C.シャトレ，既出
  22. 庭園とグリーンスペースの保全を担当するパリ市技術課
  23. フランソワ・ラマール：「クリメ・ブロック。親密なサークル」ダルシテクチュール No.37，pp.14～15，1993年7～8月号。
  24. C.ラベ。1990年11月2日のインタビュー，インタビュアー：M.エルブ，A.M.シャトレ。
  25. トリック・セレスト。1991年5月25日のインタビュー。同上
  26. パスカール・ジョフロア「普通ブロックの称賛」。ル・モニトゥール・アルシテクチュール AMC No.2，pp.40～45，1989年。
  27. クリスチャン・デヴィリエ（のインタビューによる）「ロラン・シムネとのインタビュー。サン・ドニバジリックプロジェクトの起源」建築・運動・継続 No.14，pp.54～74，1986年12月。
  28. クリスチャン・デヴィリエ（のインタビューによる）
  29. 同上
  30. クリスチャン・デヴィリエ：「エヴリーの家屋に関するノート」建築・運動・継続No.14，1986年12月
  31. 「アムステルダム教訓」今日の建築 No.234，1984年9月
  32. 「1990年のイル・ド・フランス地方の地方住宅コンテスト受賞作品」イル・ド・フランス地方建設局，建設省地方局，pp.28～31。
  33. 特に著者とアンヌ・マリ・シャトレと：同研究「住居，場所の状態。1980～1990年」パリでの分析を参照。
  34. 「ブロック内の一つの広場」建築・運動・継続 No.15，1987年3月
  35. 「ノワジー・ル・セックのPLAの77軒の住宅」参照。CAUE93のプロジェクト紹介。ポワン・ド・ルペールNo.14，1994年6月

#### <研究組織>

主査	服部 岑生	千葉大学教授
委員	モニック エルブ	パリ美術大学ビルマン建築学部建築・文化・社会研究所教授
	クリスティーナ マッゾーニ	パリ美術大学ビルマン建築学部建築・文化・社会研究所大学院博士課程
	青木 光之	千葉大学大学院博士課程
	鈴木 雅之	アトリエガイア
	高橋 淳子	アトリエガイア